
写楽浮上せず

stepano

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

写楽浮上せず

【Nコード】

N3264Z

【作者名】

stepano

【あらすじ】

寛政四年暮れ、春朗は勝川派一門から除名された。生来転居癖のある春朗は居を八丁堀地蔵橋の長屋に移し唐辛子売りなどして役者絵界への復帰の機会を狙う。

謎の絵師、東洲斎写楽の正体に迫る…

第一回

転居には慣れている。ひどいときは三日で新しいところへ引越したこともあるくらいだ。根が苛ちかも知れない。気にいらないとすぐに飛び出していく。こう何回も転居癖が身についてくると引越しの要領も心得たものだ。絵具一式と寝具さえ詰め込めばこうして埃っぽくて騒がしい天神明町から朝露の弾く音まで聞こえてきそうな八丁堀の裏通りの長屋に落ち着く段取りだ。

春朗は部屋に戻って顔を拭きながら新居の爽快な朝の匂いを感じ取った。何が童子の智なくあどけなさを示しているか。この度の狩野派総帥の激しい怒りが今も鮮明に浮かぶ。それとその前の勝川派破門の原因となった経緯が同じように繋がってくるのだった。しかし、今は我が道を行くしかなかった。

早速唐辛子売りの支度に取り掛かり今日は両国橋あたりから油町へ抜けることに決める。銭がなけりや好きな浄瑠璃も見られないしそれに絵の励みも出来ない。自分に言い聞かせつつ戸口を出た。

最初の女房とも別れ今は独り暮らし。当分このままで余計な食い扶持の心配は一人分しなくてすむ。

朝靄のかかった長屋の路地に立つ商いの格好をした姿は十日前に除名され食い扶持を失った嘗ての勝川派一門を代表する役者絵師の姿とは誰も思えない風情である。

天秤棒を担ぎながら思う。自分には絵を描くことしか能がない。

勝川派破門も狩野派追放も何の障りもない。絵を如何にして自分特有のものとして完成させていくか、それが常に求めるものであったからだ。絵は五つのときから彫っていたので体じゅうに絵に対する興味は染みついている。

歯を食い縛りながら両国近くの千石坂を上りやがてそこから下って

いつて油町筋の間屋街へと進んで行った。

カタカタと戸を開ける音が響くなかを春朗の張りきった売り声が流れる。とおがらしー。とおがらしー。その声は朝陽のなかを弾むように反射する。

「ちよいとこれ高いよ」「いいかげんの辛さなのかい」「産地はどこなさ」。乱れ飛ぶ女将さんの問いや使いの僕やらの喧騒にまみれながらぺこぺこしていると春朗にとっては初めて経験する世界なのでついこの間までの鬱積は姿を消してしまいそうであった。

こうやって唐辛子売りをするのも決して画道を捨てたわけではない。つい先だつての日光神廊の絵事再修理の随行、総帥狩野融川が描いた絵はまさに疎きに帰していた。童子の智なきあどけない様を示すといえ絵は第一に写実を基にするものだ。いくら裏に心を含んでいても評価に値しない。

その絵はひとりの童が竿を持って柿を落とす図を描いていた。しかし、竿の端は既に遙かに柿の所を過ぎていた。にもかかわらず童子は尚も足をつま立つ。果たして何の意味があるのかと指摘したことが融川に伝わり融川は怒って私を追放したのである。

今でも絵には先ず写実に忠実であることが画道の前提だと思っているし何も狩野派を非難するつもりはない。流派には秩序が一番重要なことなのだと教えられただけのことだろう。その前の勝川派破門の件だつて結局は兄弟子春好との仲違いが原因のように思われてしょうがない。

いずれにせよ再起を図る機会を待っただけだ。当分は雅号のない絵師として唐辛子売りをつづけていくしかない。

第二回

長屋に戻り売上銭を勘定していると隣の物音が妙にうら寂しく響いてくる。それを聞くとはなしに耳にしながら銭を何度数えても当てる芝居の木戸銭にあと二文足りない。足らぬ足らぬと唱えながらしばらく佇み新居の匂いを改めて嗅いでいた。しみじみここは静かなところだと気付く。この長屋にはいったいどんな住人が居るのか、朝早く出て夜遅く帰還するのでは隣の者の正体すらわからない。

今聞こえてくるのは隣人の微かな息づかいである。それは何かを唄っているのか。その声は謡にも聞こえてときには滑らかな調べである。細い響きは裏悲しく、高き音は笛の如く流れてくる。それは女の声であり年季の入った落ち着いた音色を感じさせた。まるで浄瑠璃の囃子を奏でるかのように聞こえてますますその怪しげな正体に足腰の疲れを忘れて聞き入ってしまった。

兄弟子春好のことは寢床に入っても甦り、何の運命のいたずらにつくづく勝川派破門は彼の策略にはまったとは思えない。春好にとっては師匠春章に可愛がられる私が目のうえのたんこぶだったのだろう。師匠の突然の逝去が春好にとっては願ったり叶ったりの到来の時機だった。兄弟子春好には自分の招牌絵のことで嘲笑されみんなの目の前で破り捨てられたこともあった。

しかし今でも役者絵に対する執着は捨て難く数年にわたってその若手旗手の筆頭として脚光を浴びた日々が走馬灯のように流れる。なかなか眠れなかった。

「よつ、成田屋っ」

威勢のいい掛け声が頭に甦ってくる。歌舞伎舞台は中村座、絵筆を執る自分の姿がそれに重なってくる。版元は先を競って人気役者の絵姿を描かせた。鳥居清長、歌川豊国、喜多川歌麿、勝川春章らは

その主流であり、勝川派門下にあつた自分も数々の役者似絵を描く機会に恵まれた。それらはすべて実際に歌舞伎小屋に臨場して写真するのでなく定型化した筆致のもと仕上げるのである。したがって各派にそれぞれの特徴があり歌舞伎役者は勿論のこと版元にも誰に描かすが商運の鍵を握るのであつた。しかし、再度役者絵の世界に返り咲こうにも今は破門の身、その機会は当分訪れてはこない。

春朗は長い間闇のなかで眼を凝らしていたがやがて静けさの張り詰めている現実に戻つた。足らぬ足らぬかあと二文と再び浄瑠璃見たさに唱えながら布団をかぶるといつの間にか寝鼾を立て始めた。このとき春朗三十二歳。江戸は儉約令厳しき折だつた。綱紀肅正の兆しもますます深度化しその結果、黄表紙作家等への処罰が盛んに行なわれていた。なかでも人気作家山東京伝が手鎖五十日、版元の蔦屋重三郎が財産半減の刑に処されたのは去年のことだつた。更に歌舞伎の世界も本櫓のうち儉約令の煽りを受けて森田座、市村座は既に休業し中村座だけが残っていた。

そして春朗の師匠であつた役者絵界の大御所勝川春章の死去とともにその寛政四年が暮れようとしていた。

第三回

三日三晩隣人の謡はつづいた。愈々心動かされてその正体を見極めようと決心する。浄瑠璃の声色にも似たその女の怪しさに複雑に心動かされて以って生まれた好奇心を押さえきれず遂に行動を起す。「御免よ」

売れ残った唐辛子の籠を入口の傍らに置きその戸口の前に立つ。夜風が冷たく足元は凍っていたが上気する胸はときめいていた。やがて隅の方から女の一呼吸置いた返事が聞こえてきた。

「どなた？」

声はするが姿は現われない。怪訝な空気を察知してか暫く音すら消えた。

「隣に引越した者です。夜分に失礼します」

とつづけければ、ややあってようやく現われ出でくる気配がしてきた。「何かご用でも？」

女の風采を初めて見た。歳に違わず気品に満ちていてこれは深川の芸者かはたまた何れかの賭場の大姉御風情である。春朗より一回りは上の年恰好だった。まごつく隙を見せてはならずと先ず丁寧に挨拶をする。

「姐さんの謡を拝聴し誰にとぞ風流の主がいらっしやることかと。

一度話でもお聞きしようかと伺ったわけでした」

「立ち話もぶざま、よかつたらお入りなさい」

女に案内され部屋に入った。なかは炬燵が敷かれまわりの雰囲気にもまだ正月気分が漂っていて掛けてある衣装の匂いにもそれは感じられる。全体が小奇麗に整頓され男の自分の部屋とは雲泥の差だ。「謡を励んでおられる様子は玄人とお見受けしますが何処かで伝授しておられるのか」

「なんの。なんの」

女は照れるようにして笑った。

「騒がしく伝っていたでしょう。とんだ迷惑をかけましてすいません。ただの稽古でございます。それに謡などではなくあれは小唄でございます」

三味の音も確かに混じっていたが小唄とは思わなかった。

「これはとんだ失礼をしました。ただ大したお声だと感心したのでして家元はどちらにて」

「ははは。家元だなんてとんでもございません。ただの座敷稽古でございます」

女は落ち着いていた。小唄にしては年季が入っているし座敷稽古とはいえよほどの芸人といえる。その手の経歴の持ち主であるうと春朗は思った。

「芸者でいらっしゃるのですか」

「神楽坂のお座敷に呼ばれています」

女は立ちあがって茶を汲みにいく様子。やり取り短く交わすうちに不思議と和んでいく。なるほど見渡せば箆笥の陰に三味線が置かれていた。掛けてあつた着物にも芸鼓の響りが漂う。

「不景気になったねえ、ひどい世の中だよ。松平様のご着任で町人方の豪勢な振舞いもさっぱり無くなつちまつてさあ。このところお座敷もあがつたりだよ。なんていう時代なんだろうねえ」

確かに今敷かれています。俵約令は次第に巷の奢侈を奪いつつあつた。「森田座、市村座が休業したのも役者の給金を下げたからやってくることが出来なくなつたっていうじゃないか。役者にも格付けがあるうってもの、ばかばかしくてやつてられないよ。お上公認の芝居小屋なんて所詮つぶれるのが当たり前だよ」

「まこと、おっしゃる通り」

「芝居が好きでねえ…、三代目瀬川菊之丞なんて麗しの極めだよ。眺めていると世の憂さも忘れるわ」

春朗は女の口から放たれた言葉に不意を衝かれた。瀬川菊之丞といえは自分の嘗て描きし役者のひとりである。勝川春朗の役者絵と

して三代目瀬川菊之丞の大磯の虎こそちようど一年前出版していたものだった。

第四回

「瀬川菊之丞ねえ。いい女形だ」

話を合わせながら茶を啜る。

「絵は見ましたか？大磯の虎」

「そうなんだよ、去年の正月興行の菊之丞扮する大磯の虎を描いたのが出たんだってねえ。わたし、客から聞いたんだけど手に入らなくて結局は見ずじまいだよ。残念だったわ」

まさか自分の眼の前にいる男が瀬川菊之丞の大磯の虎を描いた絵師とは思っていないだろう。春朗は黙って聞いていた。

「こんなお触れがつづくようだと……当分この楽しみもまたいつのこたやら。芝居はもう中村座だけだわねえ。なんだかこれも危ないわねえ」

再び俚約令の話に戻りながら女は溜息をつくようにして茶を啜った。相当芝居が好きなようであった。

「中村座も危ないっていう話があるのですか？」

春朗にとっては初耳だった。

「そうなんだよ。あんた知らないだろうけどさこの長屋には芝居関係の人間が多いんだよ。特にさあ、ふたつ並んだ向かい側のね、一番西の角の家、何でも中村座の仕事に携わってるらしくてその人がいうには座も今年いっぱいということらしいのよ」

「へえー、その人中村座で何をやってる人ですか？」

「さあ、よく分からないんだけど、なんでも元は阿波の能役者の流れを汲む人だとか」

「阿波の能役者？」

「そう。ちょうどあんたと同じくらいの歳恰好だよ」

面白い処へ引っ越してきたものと思った。この長屋は芝居に携わる者が多いとは。

「芝居が分かるのかい？」

「ええ、まあ」

女は春朗に視線を注ぎ穏やかな口調で尋ねた。歌舞伎役者の絵師が芝居を知らぬわけではない。先ほどから隠してはいるが勝川春朗といえは役者絵の世界ではその名を知られていたはずで、その人物が今はこうして唐辛子売りをしていることなど誰も知らない。

女は初めて会う春朗にそれ以上深くは聞かずただ最近の動静を軽く嘆いているかのようにしゃべっていた。女の首筋に年増とはいえ座敷芸者の色香がほんのりと漂っていたがどこかに陰鬱な影が写っているようにもみえた。陰りではない別物でそれは苦労の芯みtainな刻印といえそうだった。事情のある過去が小唄に現われていたといっても過言ではなかった。毎晩聞こえていた声のうら悲しさはこのせいだったかもしれない。

「ところでまだお若いようだけど何をしておいでだい？」

暫く間をおいてから女は話題を変えるように尋ねた。

「昔はちよつと絵を習っていたのですが何しろこんな時勢、食ってもいけず今は細々唐辛子を売るなどして暮らしてます」

「そうかい。大変だねえ」

「わたしも芝居が好きで、いずれ儲けた金で中村座へ見に行くのを楽しみにしております」

「そうかい、そうかい。まあ、頑張っておやり。あ、そうだその中村座へ出入りしているという能役者ねえ、何だったら聞いてみたら？ いい話が聞けるかもしれないよ」

「その方のお名前は？」

「何といったかねえ えーっと。そうだ斎藤、斎藤十郎兵衛とかいってたかねえ」

「斎藤十郎兵衛」

春朗はその能役者の名をひそかに心に刻んだ。

戸口まで見送られて外に出ると夜は既に凍りつき微かに白いものが降り注いでいる。

「おやまあ、雪だこと」

「ほんに、こりゃあ初雪」

ふたりは暫く戸口に佇んで雪を眺めた。

春朗が置いた唐辛子の籠の上に白い雪が積もっていた。

第五回

隣人の女の名は小紫といった。神楽坂の芸者で八高という料亭のお抱えであつた。八高いう座敷は文人の会合で知らぬものはなかつた。たまにお上の目付け役が姿を見せるほか富豪の町人衆が利用していたが大抵は著名な文人たちの集う場所だつた。

黄表紙、滑稽本の著作者で名を売っていた朋誠堂喜三、恋川春町、山東京伝らは昔この料亭の馴染みの客であつた。従つて小紫は巷の大方の出版事情をよく彼らからいち早く知ることができた。

しかしこれらの文人はみな刑を受けたのである。例の俚約令に抵触したからである。二年前、失脚した田沼意次のあとを継いだ松平定信が老中に就くと俚約令の内容は出版界の統制にもますます厳しさを増した。内容に過激なものや風紀を乱すような著作は作者のみならず出版した版元にも同罪が科せられ処罰された。他にこれらの統制は男女混浴の禁止等、町人の生活にも及びまた歌舞伎界にもその締めつけは広がっていく。お膝元の本櫓の座元とその歌舞伎役者の給与にまで統制が及ぶのである。それは営業時間等の運営の細事に渡つて縮小を促し、大物役者に至つては給金を減額する通達だつたのだ。これによつてついに森田座、市村座はやがて休業せざるを得なくなつた。同時に千両役者といわれたものも実在しなくなつていた。

このところ小紫の耳にはたつた一箇所だけ残つた中村座の行く末を案じる話を聞かない日はなかつた。

春朗と会つてからひと月余りが経つた頃、小紫は座敷に呼ばれて八高へ赴いた。

その日も朝から凍りつくような寒さで今にも雪が散らつきそうな模様だつた。客は珍しく描き屋の集いらしく最初から議論が伯仲していた。集いとはいつても四人だけの小宴で話す言葉尻に上方の風土

が漂いこれまで見たことのない一見の客とみえた。小紫は不思議を覚えつつ脇に入って宴を取り次ぐも彼らの議論互いに譲らず、侘びなど寂びなど雅びなどと盛んに論じ合う。

傍らに散らしたる半紙のそれに描きし絵を論じたるものか時折手に取り皆口々に論じていた。

「皆様は上方の方でいらつしやるのですか？」

小紫の問いにひとりが答えた。

「元はといえば上方の出だが、それが何か」

「いえいえ別にちよつと聞いたまです。この店には珍しいお集まりなので、それに時折見えるお方のなかに同じ上方訛りに近いひとがいますものでそちらのご紹介かと」

「どなたのことかな」

「文人のお方ですが、日本橋通りの耕書堂にいらつしやる十返舎一九とかおつしやいましたかしら」

「知らんな」

四人の代表としてその彼が答えたが、なかに覚えていた者がいて「その者、書き屋であらう。確かに聞いたことのある名前だ」と言つた。さらに、「耕書堂といえば蔦屋重三郎がやっている書肆だらう。彼はこの度の件で如何に相成つたか。身上半減といえは大なる打撃であらう」と言つた。

小紫は一瞬びっくりした。よもや一昨年の出来事を見ずや知らずの一見の客から聞かれようとは思つてもみなかつたからである。

それに蔦屋重三郎とは個人的にも彼女にとってその昔関わりがあつた。

「折角築きし十年の年月、元の財産を取り戻せるかどうか、今は苦難の日々だそうですよ」

何食わぬ顔をして答えたが彼女の心のなかは少し複雑に揺れていた。

第六回

小紫にとつて蔦屋重三郎との関わりは単にこの八高が取り持つ縁だけではなかった。

小紫は嘗て吉原遊郭の遊女だった。そのとき新吉原大門口で書物を買っていたのが重三郎だった。吉原一帯の遊女屋の一覧、その抱え遊女名、更に揚代一覧等を刷りそのうえ山東京伝の絵を組み合わせて売っていた。当然顔を合わすこともあり話すこともあった。当時京伝は北尾重政の名を用いて絵筆を執っていたことも知っている。のちに重三郎が日本橋に耕書堂を構え京伝を食客として迎え入れ大いに繁盛していたことも承知の事実なのである。

故に小紫にとつてこの度の京伝が手鎖、重三郎が財産半減の刑に処せられたことは決して他人事ではなかった。

そういつた二人の間柄を知らない四人はやがて議論の続きに入り再び手にした絵の吟味をし始めた。小紫の耳に相変わらず彼らの話す言葉のなかに侘び、寂び、雅びなどの言葉が常に含まれそれが奇妙な用語として染みついた。

「どうでしょうかこのあたりでひとまず絵のお話を休憩なすつては」
退屈でたまりかねた小紫は思いついたように立ち上がり「お陰で部屋じゅう熱がこもり少し暑くなりましたよ」と言いながら部屋の戸を開け廊下に出て小窓を少しあけた。

「ほらご覧なさい、小雪が舞っています」

窓の外を眺める小紫の声によろやく四人は議論をやめて振り返った。四人の目はやがて「雪か」と少し興奮して唸ったかと思うと吸い付けられるようにして小窓に歩み寄った。

「さあさあ頭冷やしてお呑みなんせ。雪見酒、雪見酒」

小紫は部屋に戻り三味線を弾き始めた。ところが舞い散る雪を眺めた四人は銘々に新しい半紙を取り出し絵筆を握り締めて窓辺に居

座ってしまった。

「おやまあ、これは何の塾にてあるのかしら。雪景色がそんなに珍しいのですか？」

小紫は呆れてしまった。唄の調子も進まず白けるばかりである。

「雪の降る景色が珍しいのではない。画材として見入るのだ」

黙々と描きつづけるなかで一人が言った。それぞれの半紙にはただ墨一色の濃淡が小気味よく走り、辺りは静寂が覆った。彼女の目にはその絵の巧拙など分らない。

「こんなお客さまは初めて。お客さまたちは何と称されるお集まりなのですか？」

小紫は神妙に尋ねた。

「元を正せば俵屋宗達の流れを学ぶ大和絵派の門人だ。強いて言えば尾形光琳の画風を学んでいる仲間だ」

重三郎のことを聞いた者が答えた。彼は目を窓の外に向けたまま絶えず絵筆を動かしていた。

描き終えた四人が「さあ、吞もう」と本腰を入れてようやく酒宴に入ったのは既に戌の刻を過ぎていた。

今夜の小紫はかなり呑んだ。いつものように三味を弾き小唄を唄って彼らへの供応に尽くしたつもりだったが今夜はどこか違っていた。すっかり酔い潰れてしまいついには客が引き上げたときすら気付かなかった。

しばらく寝込んでしまったあとふと目覚めると傍らに彼らの描き残していった絵の半紙が数枚丸められて残っていた。彼女は寝ぼけ眼で立ち上がると何気なくその一つ三つを懷に入れやがて八高をあとにした。

第七回

その男はトン、トン、トンと片足で走り、振り返りざまにさつと飛び上がって向きを変え舞うようにして着地した。この動作を繰り返し行い一向に飽きる気配はなかった。顔は見えずその姿は常に後ろ向きなので肩の輪郭だけが春朗の目には軽快に映っていた。小紫が言っていた西の角の家居の前でしきりにその影は飛び廻っているのである。春朗はこの話を聞いたときから斎藤十郎兵衛への興味を持っていたのだがそれが実現したのである。

何という軽業であろうか。さすがはこれが能役者の舞いというものなのか。先ほどから感嘆して眺めているのだ。僅かに疾風が轟きその薄い路地に射す光が彼の気合の入れた呼吸に反射するかのようについてくる。麻の半纏姿という粗末な稽古着に身を包み肌刺す寒さをものともせずただ一途に練習を続けている。人が近づいてもその動きは臆することなくただ同じ動作を繰り返す。トン、トン、トンと三間進んで姿勢をただしその場にて振り向いたと見せるや否や柔らかく肩を窄めて跳躍し高く浮かんで舞を決めていた。まさしくその男こそ十郎兵衛と思しき人物。春朗は間違いないと確信した。能には舞いがある。自分がこれほどまでに吸い寄せられる意味が直感として分かつていた。自分の感じたものに間違いがないとすればそれは江戸の歌舞伎には見られない何かをそれは擁していた。眺める春朗の目にはそれが見えそうな気がした。

暫くあって、男は舞をやめ春朗に気付いたのかその場で動かなくなった。春朗の影を一瞥しやがて鋭い眼光を春朗に向けてきた。「邪魔をして申し訳ない。わたしは向かいの長屋に住む唐辛子売りでございます。先ほどからあなたの余りにも見事な舞に見惚れていました」

春朗が慌てて答えると男は「新顔さんだね」と短く言った。

「去年の暮れに引つ越してきました」

春朗は初めて正面から顔を見た。身は小柄だが精悍な顔立ちでなるほど年恰好は自分と同じくらいに見えた。

小紫の部屋を訪れたときからちようどひと月が経ち世は不安な幕開けとなった寛政五年の初春、中村座の正月興行もまもなく千秋楽を迎えようとしていたときの出会いだった。

第八回

小紫の言う通りこの長屋には多数の芸人がいた。彼らのほとんどは本櫓の芝居や人気役者を真似、巷の路上で演じる集団だった。集団は昼夜となく一つにまとまって稼ぎに出ている。

「とんだ猿芝居よ。もの真似をして往来で観衆を集め演し物だものの絵を売ってぼったくる大道芸人よ。まともな役者たちじゃねえよ」

十郎兵衛は集団を非難した。春朗の部屋に上がり込みさきほどから古畳のうえに寝転んでいた。

「役者崩れですか？」

「俺とは別の世界の人間たちよ」

「あなたと同じ本櫓の仲間かと思っていた」

春朗はこのとき初めて十郎兵衛がその集団の仲間ではないことを知った。

「彼らの芸ほど下品で狡猾なものはない。詐欺だよ。彼らの演技は小屋を持たないで野外で演じて金を取る」

「なるほど」

「本櫓の前宣伝よろしく人気役者を演じて見せてその役者絵を売っているのさ。版元から莫大な売り料を掠めてさ」

「こりゃあ驚いた。本櫓の役者を描いた絵をねえ」

「結果、版元が奴らを重宝するはずだよ。何せ奴らの演技たるや観衆の気の引くコツを心得てやがる。それで集まった観衆はついつい人気役者の錦絵を買ってわけさ」

春朗は興味深い話が聞けたと思った。

「版元にとつちゃあ願ったり叶ったりだ。手間賃出しても損はしねえ。そこで奴らはますます図に乗りやがって版元連中に対して手間料を上げていく。まったく賤しい集団だよ」

嘗て春朗は役者絵を描いていた絵師だ。半ば呆然となっていた。

それにしてもその怪しげな集団の持つ観衆に受ける演技とは何か特別なものがあるのだろうか。疑問が湧いていた。

「しかし、惹きつけるわけはどんな技なのでしょうか」

「猿真似よ、猿真似。似せた演技に品を作りやあそりやあもう拍手喝采だよ。奴たちの持つて生まれた猿真似根性に何の理屈がいるものか」

「たいしたもんだ」

「ちえっ、何を感じしてやる」

十郎兵衛は吐き捨てるように言う上を向いて黙った。集団たちに対する軽蔑の念がありありと窺われる。彼には能役者としての誇りがそこに表われているようにみえた。

やがて立ち上がり、「しかし何んだねえ、江戸の歌舞伎も荒事ばかり、これはご時勢なのかねえ」と大きく溜息をつきながら帰り支度を始めた。

軽快な舞の美しさに見惚れていた春朗はこのとき思い出すように尋ねてみた。阿波といえは四国。阿波の能役者となれば上方歌舞伎の領域に入るだろう。十郎兵衛が阿波の能役者の流れを汲むことは小紫から聞いている。

「確か上方歌舞伎は荒事にはあらずと聞いたことがあるが、そうなのか？」

十郎兵衛の目がきつ！と春朗の方に向けられた。

十郎兵衛は一呼吸置くかのようにしてから春朗の前に座りなおしそれから彼の役者魂なるものを見せつけるようにしゃべり始めたのである。

それは同じ歌舞伎を演じるにも見せ場の違いについて訴えていた。「荒事に対して上方歌舞伎は和事よ。和事の第一の徴は舞よ。身ぶりや語りこそ写実の粹ってわけだよ。それに比べ荒事の粹は勇壮のみを芸の徴としている。つまり今のお江戸にはこの心意気ばかりが受けているってわけよ」

春朗は上方歌舞伎を一度観てみたいと思った。

「なるほど和事ですか」

「そうよ、繊細なふりだよ。単にお決まりの勇ましさをばかりを強調したって情緒は伝わらねえ」

「一度観てみたいものだな」

「それが吉報よ、近々に観れるかもしれねえぜ」

十郎兵衛は声を潜めて春朗に顔を近づけて言った。

「こうなっちゃあここだけの話で聞かしてやるが、並木五瓶という上方歌舞伎役者が近々江戸に来る」

「いつ頃だ？」

「それは言えねえ。内々に進めている計画よ。漏れるとやばい」

「ま、楽しみにしときな」

十郎兵衛は歯を見せて微笑むと上がり框に降りた。雪駄を履いて帰り際、更に小声で言った。

「中村座もそろそろ危ない。休業間違いなしだ」

全く別の話を聞かされて春朗は啞然とした。

「じゃあな」

十郎兵衛の姿は消えた。

春朗の脳裏で路地で軽快に舞っていた十郎兵衛の姿が再び謎に包まれて奇妙に舞っていた。

第九回

ここへ引越してきてから半年が経った。嘗ての勝川派一門の看板絵師春朗が姿を消してからそのあと今はどこに住んでいるのか知るものは誰もいなかった。

唐辛子売りに精を出しつつも常に春朗の頭のなかは再び役者絵の世界に復帰する野心に燃えていた。除名の鬱憤もさることながら今は潜伏して自分の画道を極めるしかない。そしてそれは十郎兵衛の言う和事の教理としての容や大い^{かたち}に受けるといふ大道芸人たちの猿真似の意味する容が春朗の頭のなかで渦巻くのであった。

暇が出来たある日、再び小紫の居を訪れた。

「商売もあがつたりでまた絵なんぞ描き始めようと思うのですが先立つものは金の段取り、どこかい商売はないものかと」

「おやまあ、贅沢な道楽なこと」

小紫には未だ自分が嘗て名を馳せた役者絵師だったことは述べてはいない。三代目瀬川菊之丞の大磯の虎の絵のことが頭をよぎったがあくまでも身元を明かさない覚悟だ。

小紫は相変わらず芸者風情の色香を漂わせながら茶の間に座っていた。三味の音は聞かれず静かな昼下がりである。

「そんなにお困りなら頼んであげようか？それにしても何を描くんだい」

「ただ絵の修練程度のもんで…。伝があるならお願いします」

「日本橋通りの油町に耕書堂っていう書肆があるのをご存知かい？版元は薦屋重三郎といって、ちよいと理由あつて知り合いの仲なさ。商いの世界では広く知られているしひとつ口利きでもしてもらえよう頼んであげようか？」

これは寝耳に水だった。江戸広しといえど狭きが喩えこの姐御と薦重とが繋がつていようとは思ひもしなかった。このことに困り自

分の正体がばれないとは限らない。春朗は一瞬戸惑いを覚えた。

「耕書堂とはまた大口版元。恐れ入るばかりかそちらに迷惑でもかけることになれば申し訳が立ちません。何か簡単な儲け口で結構です」

「嫌なのかい？頼んであげるよ」

薦重は嘗て歌麿の雲母摺の大首絵を売り出して大いに儲けた。当時、勝川派役者絵師春朗の耳にもこの噂は当然入ってきたし薦重に対抗すべき版元にとってはいうに及ばず浮世絵界では驚愕の出来事であった。雲母摺は贅沢な錦絵でその抜きん出た商法は他の版元を圧倒したのである。ところがその矢先の例の事件である。お抱え売れっ子戯作者京伝の洒落本が風紀綱領に触れるとして発禁、よって京伝は手鎖五十日の刑、版元の薦重は財産半減の刑を言渡されたのであった。勿論この報についても広く伝わり知らないものはなかった。

「おかしなひとだねえ。探してるんだろう儲け口」

「うむ。でも耕書堂は結構です」

薦重が春朗を知らぬわけがない。数ある競争相手のなかでも和泉屋、鶴喜屋などは薦重にとって最も手ごわい商売敵だった。嘗て和泉屋は勝川派の役者絵を独占し鶴喜屋は歌川豊国を中心とした美人画を出版して薦重の耕書堂を脅かしていたからである。その勝川派春朗が今や除名にて追放された噂などいち早く出版界の元締めの人に入らぬはずはない。

「なんだか知らないけどお前さん、ひよっとして薦屋重三郎を知っているのかい？」

春朗はただ断っただけだったが小紫は凡その見当をつけたのかそれ以上は聞かなかった。しばらく無言で呆れた様子をしていた。

第十回

「それにしてもひどいねえ、発禁となりやあその版本はことごとく絶版にさせられるだけでなく版木および印本をも没収されたあげく破棄または焼棄とはねえ。さらにそれ以後の売買が禁止されるっていうじゃないか。写本、上書きの類もこれを復刻することも写本のままどこかへ流すことなども一切だめで、これじゃあ作者も版元もまるでこの世から抹殺されるようなもんだよ」

小紫は恐ろしいほど出版の世界に詳しいことを語り春朗は度肝を抜かれた。単に噂だけでこんなことまで知り得るはずはないと思っただからである。

「今、蔦屋に居候している十返舎一九っていう戯作者がそう話してたよ。まったくひどいご時勢だよ。それに最近じゃあ大御所歌麿にも逃げられて踏んだり蹴ったり。超売れっ子だった京伝も処罰に懲りておとなしくなり身上半分押さえられた蔦屋も今じゃすっかり火の車さ」

「一九って聞いたことがない。何を書いているんですか？」

十返舎一九とは何者だろう。春朗にとって初めて知る耕書堂の食客だ。

「面白い物書き屋でなんでも今、道中記かなんか執筆中だとか。元はといえば生まれは駿河らしいが上方の物書きで東海道を膝栗毛、江戸に上って出版すべき版元を当っていたらしく辿り着いたのが蔦屋ってわけだよ。蔦屋は大いに期待してそのうち落ち着けばやがて出版されるのではないのかしらね」

まだ未完の書きものであれば分らないはずだ。それにしても蔦屋は起死回生の機会を着々と進めていることが春朗の脳裏に伝わってくる。十郎兵衛の上方歌舞伎といい上方の書き屋一九の出現といふ上方に対する興味は広がるばかりである。

「それはそうとお前さんに見せたいものがあるんだよ。これも元はと言えば上方の絵描きの連中が描きなぐった絵なんだけどさあ」

思い出したように小紫は立ちあがり「いつだったか雪の降る日に見慣れない会合があつてね お前さんが昔絵を習つてたと言うから見せてやろうと思つてね…」と言いながらゴソゴソと部屋の片隅を探し始めた。やっとそれを見つけたらしく「これだよ」とくしゃくしゃになつた絵を春朗の目の前に差し出した。

「侘びだとか寂びだとか雅びだとか盛んに議論し合つててさあ喧々譁々だったわよ…。この絵つていったい何処がそんな風なのかお前さん分るかい？」

春朗は数枚の絵を見て暫く黙る。

「あの夜はちょうど雪が降つていて障子窓から見た雪景色を描いたんだねえ…こんな絵つていい絵なのかい？」

春朗の目はますます食い入るように眺め入った。

「ねえ、どうなのよ」

小紫の声が遠くに聞こえた。春朗の眼前に異様な旺盛心が群がっていた。この画風は誰が広めしものかを知りたい衝撃に駆られた。興奮が口からこぼれて早口で小紫に問う。

「連中の名は何と言つていましたか？」

「何でも俵屋宗達の流れを汲む大和絵師、尾形光琳の一門だとか」単に墨による一筆の描写が春朗の心を貫いていた。門派の名をしつかりと頭に刻みいつまでもその絵を見つめながら唸りつづけた。

「ねえ、感想はどうなの。何故黙つてるのさ」

確かに黒墨の濃淡に茶道のそれと合い通じるものが見えてきそうな気がする。しかも大和絵の発祥はこれまた上方。春朗にとって上方はすべて新たな容であるように思われた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3264z/>

写楽浮上せず

2011年12月16日23時48分発行